

パリ2024を振り返る

— 塾生の出場選手・サポーターに聞く —

日本代表選手が大活躍したパリ2024オリンピック・パラリンピック。その中には塾生としてキャンパスで学んでいるアスリートもいます。陸上競技とフェンシング、在学中の代表選手2人に競技との向き合い方とオリンピック出場、そして学生生活のお話を伺いました。またパラリンピック選手の活躍をサポートトレーナーやボランティアとして支えた塾生からのレポートも紹介します。

TOYODA Ken



写真提供：共同通信社

環境情報学部4年 | 豊田 兼君

2023年日本インカレ400メートルハードルで同着優勝を果たし、学生日本一に。2024年日本陸上競技選手権大会400メートルハードルで優勝。パリ2024では陸上競技男子400メートルハードルに出場。

対談

IIMURA Kazuki



© (公社) 日本フェンシング協会

総合政策学部3年 | 飯村一輝君

小学1年生でフェンシングを始める。18歳で2022年の世界ジュニア選手権を制覇し、日本選手最年少でメダルを獲得。パリ2024男子フルーレ団体では金メダル、男子フルーレ個人では4位の成績を残した。

同じキャンパスなのに
なかなか出会えない？

— フェンシング、陸上競技の日本代表選手としてパリ2024オリンピックに出場した飯村君と豊田君に、今日は「塾生」としてどのような学生生活を過ごしているのかを中心にお話を伺います。お二人とも湘南藤沢キャンパス（SFC）で学ばれていますが、以前から面識はありましたか。

飯村 実は豊田さんと初めてお会いしたのは今回のオリンピックがきっかけでした。もちろん存在は知っていましたが、いつかキャンパスでお見かけすることもあるだろうと思っていただけですが、同じ授業を選択していないと会えないですよ。オリンピック期間中もお話しする時間はなかったのですが、帰国後に今回のオリンピックで活躍した選手に与えられる「上月スポーツ賞」の大賞を受賞した際、その表彰式で豊田さんに声をかけていただきました。

豊田 SFCでパリ2024壮行会を開いてくれたこともあり、その前にメディアでさまざまな競技の日本代表選手をチェックし、塾生や塾員、教員の

メンバーを調べていて、同じSFCにフェンシング代表の飯村さんがいることを初めて知りました。パリでは女子レスリングの尾崎野乃香選手とお話する機会がありました。彼女も私と同じ環境情報学部です。

飯村 オリンピック期間中も他競技の選手とじっくりお話しする機会はあまりなかったですよ。だから今回こうして豊田さんとお話してできることを楽しみにしていました。

豊田 私もです。慶應義塾のオリンピック同士で会う機会をもっとつくりたいですね。

——お二人のオリンピック出場に向けての取り組みについて教えてください。

飯村 子どもの頃からオリンピック出場は意識していました。私は身長が170cmとフェンシング選手としては小柄で、180cm以上が当たり前の海外の選手と比べると決定的なリーチの差があります。その差自体は埋めようがないので、私はスピードでそのハンデイを克服しようと練習を重ねてきました。大きい選手にとっては、私のような選手がスピードを生かして挑んでくることが、実にやりにくいと思います。

実は高校時代も東京オリンピック出場を目指していたのですが、日本代表から外れてしまい、出場する選手の練習パートナーを務めていました。そのときの悔しさが今回のパリ大会出場の原動力になったと思います。オリンピックイヤーの3年生春学期は大学では履修を最小限にとどめ、競技の練習に集中しました。おかげで3年生秋学期は授業やテストでかなり苦労しています(笑)。

豊田 高校生の頃、自分がオリンピックに出場できるなんて思ってもいなかったですし、それこそ「夢物語」として捉えていました。それでも大学入学後は、パリ大会に向けて基礎から練習に取り組みました。おおむね予定通りに練習をこなし、なんとか出場することができてとてもうれしかったです。私の父はフランス人で、私自身も子どもの頃にフランスで生活したことがあります。今も父方の親戚がいるので、パリ大会出場にはひときわ思い入れがありました。これで飯村さんのように結果を残すことができていたなら、言うことはなかったのですが……それは次のロス大会に持ち越します。

飯村 フェンシングはフランス生まれの競技ですから、私もパリ大会には特別な思いを抱いて挑みました。団体でこそ金メダルを獲得できましたが、個人戦では4位というあと一歩メダルに届かない順位にとどまり、そのことが悔しくて……。豊田さんと同じくロス大会に向けて再始動します。もちろん目標は「金メダル」です。

豊田 近年、日本のフェンシングは強くなりましたよね。

飯村 今、急成長を遂げていて、今回も予想を上回るメダル獲得数でした。日本フェンシング女子で初のオリンピックメダルを獲得した代表メンバーの宮脇花輪さん(今号「塾員山脈」9ページ参照)も慶應義塾出身で、子どもの頃からのフェンシングを通じた友達です。

「文理融合」の多彩な学びがSFCで学ぶ魅力

——それぞれ競技は異なりますが、子どもの頃から競技を続けてきたお二人がなぜSFCを選んだのでしょうか。

豊田 陸上競技を始めたのは小学生の頃で、中学・高校と陸上競技部でハードル競技を続けてきました。とはいえ

スポーツの名門校ではなく、私自身もなんとかインターハイに出場できるレベルでした。ところが高校3年生のときに新型コロナウイルス感染症拡大によってインターハイが中止となり、大学でも競技を続けないとあきらめがつかない気持ちになりました。大学進学にあたって調べていたら、高校も理系クラスに所属していた私は、興味があった人間工学、バイオメカニクスなどについて幅広く学べそうなSFCが目にとまりました。もちろん、競走部に日吉グラウンドという素晴らしい練習環境があることも大きな魅力でした。

飯村 私の場合、父がフェンシングの指導者で、太田雄貴選手（日本初のフェンシング競技オリンピック銀メダリスト）のコーチを務めていたこともありです。私自身は小学校1年生のときに競技を始めたのですが、実を言うと最初の頃はイヤイヤやっていました。やる気が出たのは小学校2年生のとき。大会で初めてトロフィーをもらって試合で勝つ達成感を知ったからです。その後、4年生と6年生のときには全国大会優勝を経験しました。やがて代表選手として世界で戦う面白さを体験す



エッフェル塔をバックに（飯村君）

ることになり、その頃からオリンピックを意識していたと思います。

一方で、高校時代からずっと「文武両道」を目指していました。フェンシングだけでこの先の人生を生きていくのは難しいですから、何か自信を持てる学問を身に付ける必要を感じていたのです。高校時代から選手として実績を残していましたので、多くの大学からお誘いもいただいていた。そこであえて慶應義塾を選んだのは、総合政策学部で文理融合のトップレベルの学びができると思ったからです。

豊田 文理融合はSFCの大きな魅力ですよね。私も環境情報学部で人間工学・バイオメカニクス分野を中心に、

興味のおもむくままにさまざまな授業を履修して自分の視野を広げることができたと思っています。おかげで以前より俯瞰的に競技を見ることができるようになりました。スポーツ工学、スポーツバイオメカニクスがご専門の仰木裕嗣教授の研究会に所属し、現在は卒業研究として私と同じハードル競技選手の動作解析に取り組んでいます。実験データを得るため自分も含めた被験者に実際に走路を走ってもらい、それを14台の赤外線カメラで捉えた映像を3D解析しており、膨大なデータを扱うのは大変な作業ですが、競技者としてのパフォーマンスに直結する研究なのでやりがいは大きいです。

飯村 アスリートの一人としてとても興味深い研究だと思います。私はどちらかといえば文系で、高校生の頃から社会のすべてを規定する「法学」分野に関心があり、入学直後には法律系の授業を片っ端から履修していました。ただせっかくの文理融合型カリキュラムでもあり、将来的に自分で事業を手がけたいという思いもありましたので、次第に経営・ビジネス関係やスポーツ関係の授業など、豊田さんと同じく自



選手の動作解析の様子（豊田君）

分の視野を広げるためにできるだけ多彩な学びを心がけています。

豊田 SFCは面白そうな授業が多いので、自分のキャパシティを度外視してついついたくさん科目を履修してしまします。おかげで私は睡眠不足に陥ったこともありました（笑）。飯村さんはどんな研究会に所属しているのですか。

飯村 今回のパリオリンピック男子体操の監督を務めた水鳥寿思准教授とパラリンピック車いすフェンシング監督の千田健大専任講師の合同研究会に所属しています。スポーツを中心に多彩な研究をしている研究会で、私は近年の「若者のスポーツ離れ」を念頭に、子どもたちがスポーツに親しむ機会をど

う提供していくことができるかというテーマで、ビジネスの視点も取り入れた研究を進めていきたいと思っています。

パリで味わった悔しさが「ロス大会」へのモチベーション

——お二人とも4年後のロス大会を目指して競技を継続するということが、パリ大会の総括と今後の展望や抱負について教えてください。

豊田 父の母国での大会で結果を残せず、とても悔しい思いをしました。この悔しさはやはり次の大会で結果を出すことでしか晴らすことはできないと思っています。ただ今回の大会期間中には選手村で海外の選手たちと交流できたことはかけがえない思い出となりました。もちろん、今後は彼らと数々の国際大会でまたライバルとして戦うことになるでしょう。今年度で学部は卒業ですが、来年度は企業チームで競技を継続することを考えている一方で、修士課程に進学して学部で取り組んだ研究を深めていく道も模索しています。

飯村 私は3年の春学期、最小限の履修で済ませたので、オリンピックから

帰国後の秋学期は、その分履修科目を増やし、非常に厳しい日々を送っております（笑）。パリオリンピックを振り返ると、やはり個人戦4位の悔しさは残りますが、今まで経験した国際大会の中で最も楽しかった大会でした。オリンピック試合中から、「このグラウンドの地でずっと試合をしたい」と楽しんでいました。どんな大会でも緊張していますが、緊張の捉え方やその扱い方を心得ているため、緊張を楽しむことができることが多いです。しかし、その中でも団体準決勝のフランス戦は経験したことのないアウェーでもあったためプレッシャーに押しつぶされそうになりました。

豊田 今回飯村さんとお話できて、次回ロス大会に向けた刺激をいただきました。これからパリオリンピック出場メンバーの慶應義塾関係者が親睦を深め、情報交換できる機会をつくっていきたいですね。

飯村 今後ともどうぞよろしくお願ひします。競技やオリンピックの話だけでなく、好きな食べ物やゲームなど、大学生らしいお話もいっぱいしましょう。



健康マネジメント研究所
博士課程1年
くにながやひろ
國田泰弘君

パリパラリンピック2024において、私は車椅子マラソン選手・鈴木朋樹選手（トヨタ自動車株式会社）のサポートトレーナーとして帯同しました。鈴木選手は見事に銅メダルを獲得し、個人種目で初のメダルを手に入れました。その瞬間に立ち会い、彼の夢の実現を支えられたことは、私にとってかけがえのない宝物です。

この度、パリでの鈴木選手との日々をお伝えするとともに、パラリンピックを通じて私が感じた「スポーツの力」について綴りたいと思います。

私が初めてパラリンピックを体感したのは、東京2020大会でした。当時、公式メディアカルスタッフとして、国立競技場で救護にあたっていました。選手たちの競技の美しさやスケールには感動したものの、目の前の業務に追われ、本当にその場の熱気を味わ

いきたかというところ、疑問が残りました。

それに対して、パリ大会では全く異なる体験ができました。メイン会場であるスタッド・ド・フランスで繰り広げられた選手たちのパフォーマンスに、私は息をのむ瞬間を何度も味わいました。視覚障害の選手とガイドランナーが一体となって走る疾走感、義足でリズムを刻むランナーの力強い走りや跳躍、片脚だけで助走から踏み切ると走り高跳び選手の気迫、そして車椅子競技のスピード感あふれるスプリントと駆け引き——そのすべてが私の心を震わせました。

満員のスタジアムから湧き起こる歓声、自然と響く手拍子、そして選手たちの驚異的なパフォーマンスに、会場全体が立ち上がって応える瞬間。その場にいるすべての人々が一体と



鈴木朋樹選手と、銅メダルを手にして

なり、熱気が渦巻くその空間に、私はスポーツの神髄を見ました。アスリートが全力を尽くす姿は、見る者の心を動かし、熱狂が次々と伝播していく。まさに、これこそが「スポーツの力」だと強く感じた瞬間でした。

この経験を通じて、オリンピックとパラリンピックを超えた普遍的なスポーツの力を再認識しました。そして私も、そんな感動を生み出す一助になりたい、熱狂を広げる仕事に携わりたいという思いが強まりました。今後は、現場でのトレーナー業務にとどまらず、研究活動を通じて科学的な知見を提供し、さまざまな形でアスリートを支えていきたいと考えています。

最後に、私は現在、大学院健康マネジメント研究所の博士課程に在籍しています。こうした活動を支えてくださった研究科の先生方、そして何よりも日々支えてくれる家族に心から感謝申し上げます。これからも挑戦を続け、スポーツの力を広げていけるよう邁進していきます。



観客の熱狂にあふれたスタッド・ド・フランス

「挑戦」を支え合ったパリ2024



矢島優里君
法学部政治学科1年

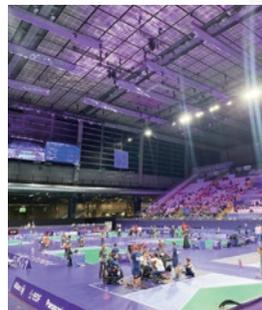
私はパリパラリンピックでボランティアとして選手のチェックイン・チェックアウトや観客の誘導、インフォメーションセンターでの案内などの活動を行いました。この活動に応募したのは、高校留学でフランスに滞在しているときに母に勧められたことがきっかけでした。幼い頃から、音楽やスポーツなどさまざまなことに挑戦してきましたが、自分自身はいつも誰かに支えてもらう側であったため、誰かをサポートするという経験をしてみたいと思ったからです。

世界中から集まった異なる文化や価値観を持つ人々と働く毎日は、学びの連続でした。特に、日本とフランスでの「働く」ことへの考え方の違いを大きく実感しました。例えば、私は日本にいるときは周りの目が気になってしまい、どんなに小さな仕事でも間違え

てはいけない、リスクの少ない選択をしないでほしいと思ってしまいます。しかし、フランスでは、何かうまくいかなければよいという風潮がありません。そのため、母語が日本語である私自身も、英語とフランス語が流暢に話せることが必須である仕事にためらうことなく挑戦できました。

さらに、パラリンピックということで、選手だけでなくスタッフや観客にも障害のある方が多くいました。初めは戸惑うこともありましたが、周りの仲間たちは作業が効率的に進まなくても不平を言うことはなく、むしろ日常生活では助けられることの多い彼らに対し、人を助ける役割を提供できることがうれしそでした。アシリートを支えるだけでなく、スタッフ同士でもたくさんの「挑戦」を支え合う環境に身を置けたことは、非常に貴重な経験となりました。

また、私の活動を知った世界中の友人から反響があったこともうれしかっ



活動していたパリ南アリーナ。ボッチャ、卓球、ゴールボールの試合が行われた

たです。フランスの高校時代の友人からは、「パリ2024でまたフランスに帰ってくるという夢がかなってよかったね」とメッセージをくれました。また、次回の2028年大会がロサンゼルスで開催されることから、私と同時に留学していたアメリカの友人とは「私もボランティアをする予定だから、そこで再会できたら最高だね!」と話しています。

今回、一緒に働いていたスタッフの中には、パリの大学や大学院に来ている留学生がたくさんいました。大学在学中に再びフランスへの留学を目指している私にとっては、一番近い将来の目標を実現している彼らに話を聞くことができたという意味でも、とても勉強になりました。将来の具体的なビジョンはまだ決まっていませんが、今回の経験を通じ、あらためて日本国内にとどまらず、国際社会を舞台上に活躍をしたいと考えています。

パリ2024を振り返る

— 塾生の出場選手・サポーターに聞く —

Photo
Sketch



TOYODA Ken



IIMURA Kazuki



KUNITA Yasuhiro



YAJIMA Yuri



『塾』編集部では、皆さまのご意見を今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。
『塾』の特集に、取り上げてほしい企画がありましたら、二次元コードよりぜひご回答ください。